

ハトムギ マニュアル



<令和7年産 重点対策ポイント>

- ・ 6月20日までに播種を終える。
- ・ 2回の病害虫防除を必ず行う。
- ・ 中耕培土と除草剤散布で雑草防除を徹底する。
- ・ 出穂期以降に畦間かん水を行う。

令和7年4月

アルプス農協管内農業技術者協議会

1 圃場の準備

(1) 圃場の選定

- ・以下の条件を満たした圃場での作付けをお願いします。

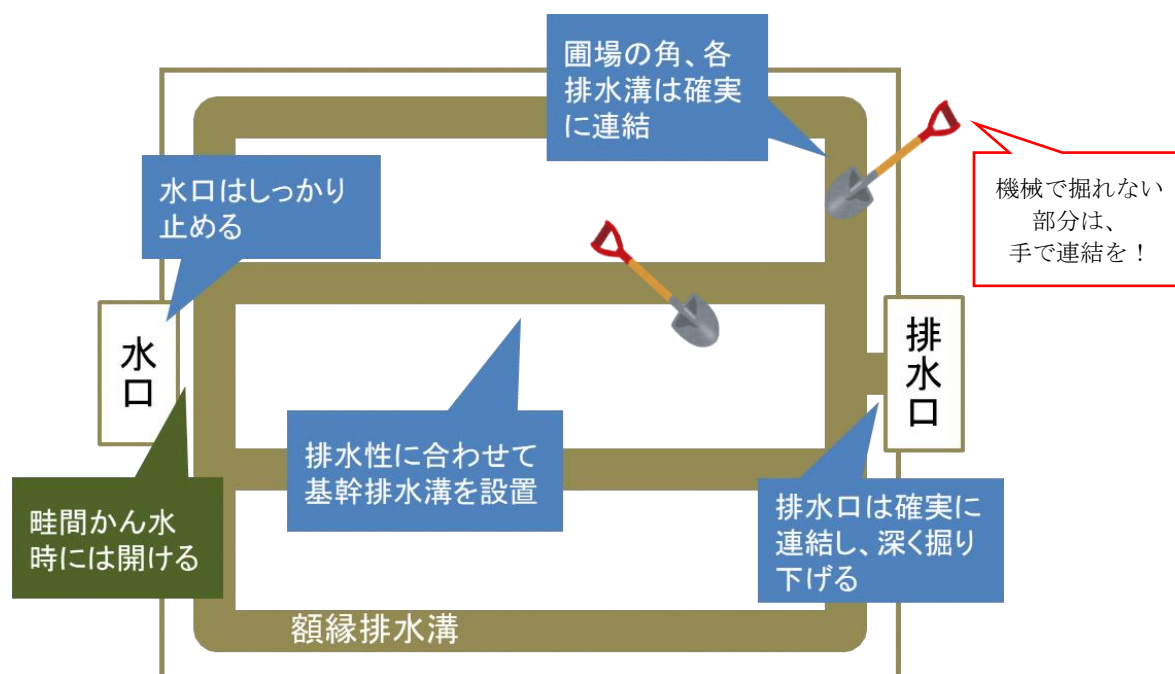
選定圃場の条件	理由
連作でない	雑草害、病虫害の回避
排水が良い	砕土率を高めて、発芽率や除草剤効果を高める。
畦間かん水ができる	夏場のかん水により、登熟を高め収量を確保
団地化	近隣水田からの漏水を最小限にする。 農薬のドリフト防止対策

※やむを得ず、連作を行う場合は、以下の点を必ず実施して下さい。

- ①刈り取り跡の刈り株を、フレールモア等で細断する。
(ネキリムシやアワノメイガの越冬成虫の住処をなくす)
- ②病虫害防除剤（ロブラル、パダン等）を確実に散布する。
- ③除草剤散布や、培土等により、徹底した除草対策を行う。

(2) 排水対策

- ・早めに額縁排水溝を設置し、播種までに圃場の乾きを促進しましょう。



排水対策のポイント

(3) 耕起前の除草剤散布

- ・耕起前に雑草が多い圃場は、除草剤を散布しましょう。

薬剤名	適用雑草	10a当り薬量	使用時期 使用方法	使用回数
ラウンドアップ マックスロード	1年生雑草	200～500mL 希釈水量 50～100L	耕起前又は播種前 (雑草生育期) 雑草茎葉散布	2回以内

(4) 土づくり

- ・pH6.0～6.5を目標に、石灰質資材(粒状貝化石 150kg/10a)を散布しましょう。

2 種子消毒

- ・主要な病害である「葉枯病」の菌は、汚染種子を介して伝染することから、種子消毒は必ず行いましょう。
- また、出芽率と出芽揃い向上のため、消毒を兼ねて十分に浸種してください。

【種子消毒と浸種の方法】

- 消毒剤：ベンレートT水和剤 20（希釈倍率 200 倍）

10a 当たりの必要量 種子 3 kg＋薬剤 75g＋水 15L

- 浸種：10～15℃の水温で、72 時間（3 日間）（3 日を超える浸種は、出芽率を低下させることもあるので注意）

- 風乾：浸種を終えた種子は水洗いせず、直ちにネットから出して風乾してください。

浸種が長すぎたり、水切りが不十分な場合は、発芽してしまうので注意。



浸種中にネット内で発芽したハトムギ

3 播種作業

(1) 播種時期及び播種量

- ・播種が遅くなると、分げつが少なく、穂数が確保できないことや、登熟期の気温が低くなることで、登熟が悪くなり収量が低下します。
そのため、必ず、5月下旬～6月20日に播種を行い、播種時期に応じた播種量としましょう。

播種時期の目安	10a 当たり播種量の目安	播種深度
5月下旬～6月9日	3 kg	3～4 cm
6月10日～20日	4 kg	

(2) 基肥施肥量の目安

- ・施肥量は以下を目安としましょう。
- ・「LPはとむぎ専用」で規定量が入りにくい場合は、窒素濃度を高めた「ハトムギー発N36」を使用し、窒素成分を十分に入れましょう。

肥料名	N : P : K	施肥量
LPはとむぎ専用	30－8－8	40～50 kg／10a
ハトムギー発N36	36－4－5	35～45 kg／10a

- ・肥料はタンクに均等に入れて、播種中に均等に減っているか確認して下さい。

(3) 除草剤散布

- ・播種後すぐに、以下の薬剤で雑草防除を行いましょう。

薬剤名	10a 当たり 薬量	希釈水量	使用回数
サターンバアロ乳剤	500mL	100L	1回
ゲザプリムフロアブル	200mL		1回

- ・2剤混合で、散布する。

4 生育期の除草

(1) 中耕培土

- ・播種時に散布した除草剤は、2～3週間で効果が切れるため、雑草が大きくなる前に中耕培土を行い、雑草の発生を抑えましょう。

	時期
1 回目	播種後 25 日頃
2 回目	1 回目の 10 日後

培土により、
地際から支持根
が発生し、倒伏
を回避します。



支持根の発生



雑草を抑えると
ともに生育量の
確保につながり
ます。

- ・播種時に、基準の基肥量が入らなかった場合は、培土にあわせて「尿素：10a 当たり 5～10kg」を追肥して下さい。

(2) 除草剤散布

薬剤名	適用雑草	10a 当り 薬量	使用時期	使用回数
バサグラン液剤	1 年生雑草 (イネ科 除く)	150mL 希釈水量 70～100L	生育期 (雑草 3～6 葉期、 ただし収穫45日前まで)	2 回 以内
プリグロックスL	1 年生雑草	600mL～1,000mL 希釈水量 100L	畦間処理：雑草生育期 (出穂前まで) ただし、収穫60日前まで	2 回 以内

* プリグロックスL はハトムギにかからないように注意する。

5 病害虫防除

- ・ハトムギは、「葉枯病」と「アワノメイガ」の防除が大変重要となります。
- ・アワノメイガの発生に応じて7月上旬頃とその15日後の2回の防除を徹底してください。

	薬剤名	対象 病害虫	倍率 (倍)	使用量 (10a 当たり)	散布液量 (10a 当たり)	使用 回数
1回目 (7月上旬頃)	パダン SG 水溶剤 (収穫14日前まで)	アワノメイガ	1,500	100g	150L	2回 以内
	＋ ロブラール水和剤 (収穫21日前まで)	葉枯病	1,000	150g		3回 以内
2回目 (1回目防除 の15日後)	パダン SG 水溶剤 (収穫14日前まで)	アワノメイガ	1,500	100g	150L	2回 以内

※展着剤（ハイテンパワー10,000倍）を加用してください。

※1回目防除後に、葉枯病が発生した場合は、「ロブラール水和剤」で随時防除してください。



葉枯病が発生したハトムギ

葉枯病

楕円形の病斑が、下位葉から上位葉へ進展し、白く枯れ上がる。

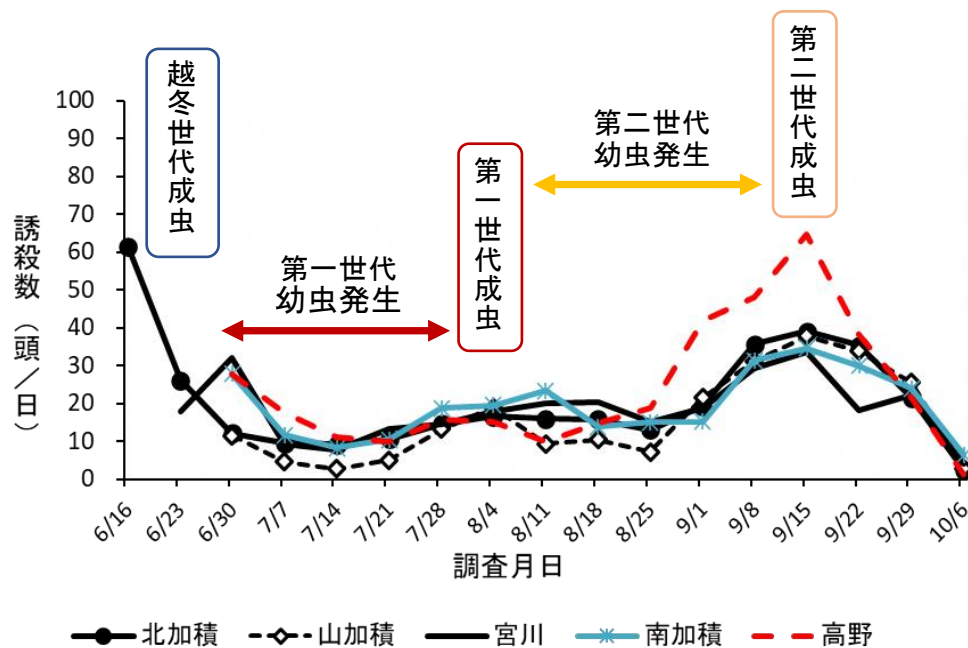


アワノメイガの幼虫

アワノメイガの被害

茎と葉の付け根付近から茎内に侵入し、内部の髓を食害する。被害茎は枯れ上がる。

○参考:アルプス管内のアワノメイガ発生状況

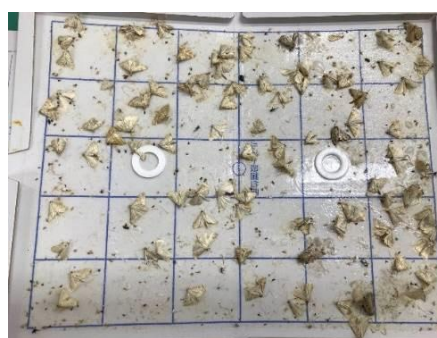


各地区における日ごとのアワノメイガ誘殺数 (R 3 調査データ)

- ・アワノメイガの発生状況調査を実施したところ、地区によって発生量や発生時期にばらつきはあるものの、すべての調査地区においてアワノメイガが発生していました。また、アワノメイガの発生ピークは、ハトムギの生育期間中に3回あると考えられます。
- ・適期に2回の防除を行い、アワノメイガによる被害を抑えましょう。



トラップ設置状況



誘殺状況

6 畦間かん水

- ・ハトムギは、出穂期以降に最も水分を必要としますので、必ず「畦間かん水」を行ってください。
 - ・水分不足になると、肥料の吸収が抑えられ、生育が停滞します。
- また、植物体内から水分が蒸発し、葉が巻き始め、不稔粒の発生により、収量が低下します。



畦間かん水



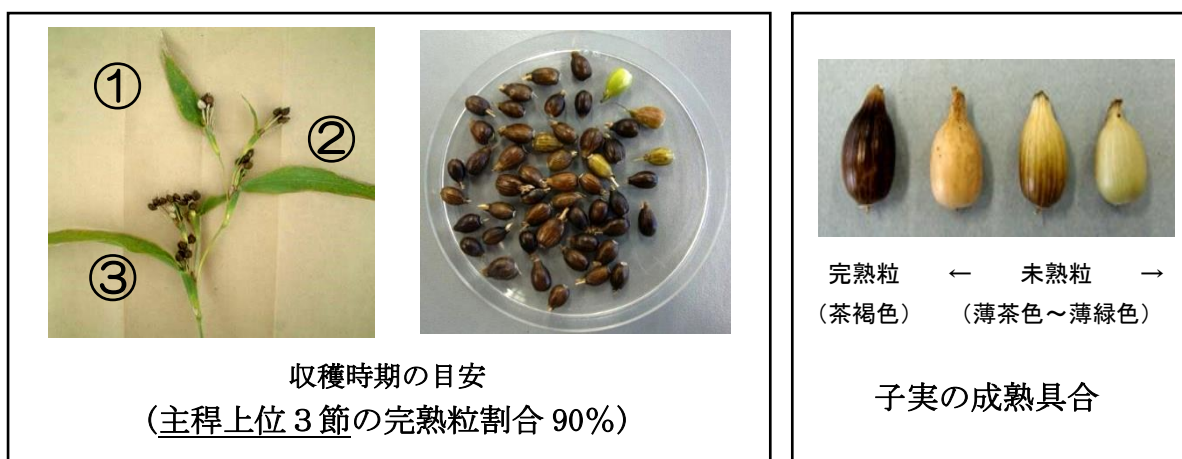
水分不足のハトムギ



ハトムギの不稔粒

7 収穫

- ・播種後 120～130 日を目安に登熟状況をしっかりと確認し、遅れず速やかに収穫しましょう。収穫適期は、完熟粒（茶褐色の子実）の割合が主穂上位 3 節で 90%、株全体で 70～80%の時期となります。
- ・大豆コンバインでの収穫は、1 条刈りでゆっくり行いましょう。
- ・刈り高さは、着粒の最下部分からの高刈りとします。



8 次年度作付けの準備

- ・次年度に、ハトムギの作付けを予定している圃場では、圃場が比較的乾いている秋のうちに、額縁排水溝を設置しましょう。
- ・前年の秋に、排水対策が実施できなかった場合は、3～4月のほ場が乾いている時にいきましょう。



額縁排水溝の設置

- ・刈株の茎の中で越冬するアワノメイガの幼虫を防除するため、茎が柔らかい刈株をフレールモアで細断し、耕起する。



刈株の細断



ハトムギの刈株で越冬する
アワノメイガの幼虫